

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

人間性豊かに生きる — 「人間性」を求める —

10

令和4年 No.1328



令和3年度 第74回山口県学校美術展 推奨作品
「うんどうかい」

東荷幼稚園 年長(受賞時) はやし けいたろう
林 恵太郎

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykoyoikuk.or.jp> E-mail ykoyoikuk@ruby.ocn.ne.jp

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長：倉増誠彦／編集長：西岡 尚



■乳幼児の教育・保育

乳幼児の育ちと学び支援センター

次長 中谷 仁美

山口大学教育学部附属幼稚園

副園長 大森 洋子

学校法人認定こども園 蓮生・まこと幼稚園

園長 池田 悠

下関市立豊東幼稚園 園長 松本 寿子

■国語科指導のポイント(小学校)

周南市立夜市小学校 教諭 花岡 鉄平

■国語科指導のポイント(中学校)

下関市立安岡中学校 教諭 川口 由美子

■第73回日本連合教育会研究大会東京大会

山口市立仁保小学校 校長 荒木 和博

■地域活性化活動助成事業

萩市立大井小中学校 小学部

教頭 岡田 淳

あなたの アクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」三つのアクション

- ◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
- ◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち
- ◎ゴミ 落書きのない
美しいやまぐち



山口県乳幼児の育ちと学び支援センターの紹介

乳幼児の育ちと学び支援センター
次長 中谷 仁美



図2 本センターHPへ

令和3年3月に策定された「山口県新たな時代の人づくり推進方針」では、「乳幼児期における教育及び保育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」として、さらなる質の向上を掲げています。この実現を図るため、国公立や私立、保育所や幼稚園、認定こども園等施設

類型の区別なく、保育士や幼稚園教諭、保育教諭等保育者に対する研修や助言、情報提供等の施策を総合的に実施する拠点として、本センターは令和3年4月に設置されました。本センターの概要が図1です。保育者の専門性向上に資する研修メニューの企画・立案を行う研修部。幼児教育アドバイザーやスクール

ソーシャルワーカーによる園運営の在り方等に関する助言や相談を行う支援部。乳幼児期の育ちと学びを小学校以降の生活や学習にながむための接続カリキュラムの開発等を行う調査研究部。これらの取組をもとに、情報発信・普及啓発も行っています。例えば、「特別支援教育・保育専門研修」や「乳児保育専門研修」を、オンラインや対面形式で行い、保育者の方々が共に学ぶ場

になっていきます。参加者から「子どもとの関係性を見直す良い機会になった」等の声がありました。

本センターの職員には、保育士や幼稚園教諭としての勤務経験をもった指導主事や、健康福祉部、総務部等の教育庁以外の職員がいます。このような部局横断的組織の強みを生かして、国公立・私立、施設類型の区別なく、県内すべての乳幼児に、質の高い教育及び保育が届けられるよう努めています。

今後も、乳幼児期の教育及び保育のさらなる質の向上を図り、新たな時代を担う人づくり推進体制の構築を目指して、職員一丸となって業務に取り組んで参ります。なお本センターの詳細については、図2のQRコードからホームページをご覧ください。

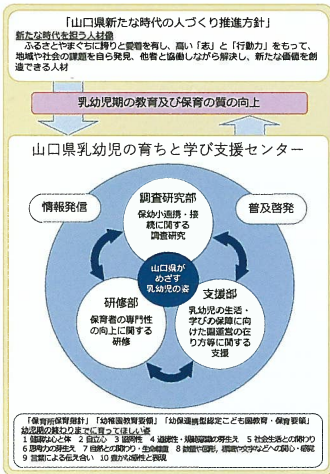


図1 「センターの概要」



12年間を見通しながら今を楽しむ

山口大学教育学部附属幼稚園
副園長 大森 洋子

本園では、附属山口小・中学校と共に、「よりよい未来を共に創り出す人間」をめざす人間像として、幼小中一貫教育に取り組んでいます。12年間の子どもの学びと育ちを繋げるために、共通の視点で子どもの姿を捉え、保育に努めています。

たとえば、「対象と向き合う姿」を視点にみると、幼稚園でアサガオの種まきをした子どもたちは、せつせと水をあげたり、「芽が出たよ」「花が咲いたよ」と喜んだり、花できれいな色水を作ったりして、一つの喜びや感動が次の行動の原動力となることを実感しています。そして、種を採りながら、「フウセンカズラの種は丸いけど、アサガオの種は三角だね」「二つしか植えてないのに、こんなに種が採れてすごいね」「袋の中に入っている種の数はいろいろだよ」「下の方から茶色になるね」などと言う姿から、一人ひとりの興味・関心を大切にすることで思考力が芽生え、探究心を育むことに繋がっていきと考えます。さらに、小学校で生活科を学ぶ子どもたちは、「アサガオの花はどうして朝咲くの?」「みんなに『おはようを』言いたいからだよ」と、知的な気付きをもてる子どもにも成長し、学びを積み重ねてい



くことでしよう。私たちは、このような姿を職員同士や小学校教員とも報告し合い、共有するように努めています。

一貫教育に取り組み始めて、幼稚園の3年間だけでなく、12年間の成長の見通しをもって保育するようになりました。また、子どもたちの何気ないつぶやきや行為の奥にある意味をより深く考えるようにもなりました。今、目の前で遊びを展開している子どもたちの姿は、小一中へと繋がっています。このことを意識しながら、12年間の教育の礎となる幼稚園の「今」を十分に楽しみ、しっかり育てていきたいと思っています。



『喜び』から生まれる運動性

学校法人認定こども園 蓮生・まこと幼稚園
園長 池田 悠

本園の園目標に、「いのちを輝かせよう」とともに学びあい 育ちあいかかわり合い 生きる力をつけよう」とあります。

幼稚園という場所は、子どもたちが育つ豊かな場であり学びの場です。しかし、同時に保育者が育つ場所でもあります。「昨日〜で遊んだよ!」「先生、僕、逆上がりが出来たよ!」と子どもたちの喜びの声が聞こえてきます。保育者たちは、この子どもたちが喜び成長する姿を目の当たりにすると「すごいね! 頑張ったね!」というような言葉をかけると思います。これは保育者の『喜び』、この保育者の喜びを感じ取り嬉しさを表現していくのが子どもの『喜び』です。子どもたちの様々な心は大切であり、特にこの『喜び』こそ、子どもたちの成長に欠かせないものだと考えています。

保育者が感じる『喜び』と子どもたちが感じる『喜び』は歯車のように噛み合い運動して動いているのです。お互いが動かし合って初めて回り始めるのです。まさに「ともに学びあい 育ちあい かわり合う」ことで生きる力を育むということに繋がるのだと思います。つまり、『喜び』が生む運動性と

言えるでしょう。私も、子どもたちが「園長先生好きだよ!」「見てみて!」とニコニコの笑顔で寄ってくる姿を見ていると嬉しい気持ちになります。

子どもたちもきつといろいろな事に喜ばれて嬉しい気持ちになっていきながら、力に変えていくのだと。今日も子どもたちの元気で嬉しさや喜びに溢れた声が聞こえてきます。遊びの中でも「ともに」を大切にしていけるとよいと思います。



鉄棒を頑張る子ども



心の根っこを育てよう

下関市立豊東幼稚園
園長 松本 寿子

本園は、下関市菊川町の豊かな自然環境に恵まれた幼稚園です。出生数の減少と、保護者が共に就業することでのわが子をこども園に通園させるご家庭が増加したこともあり、年々、園児数が減少しています。

幼児期の教育は、「環境を通して行う教育」が基本になっていきます。様々な人・物・事・自然などといった身近な環境とかかわることから生まれてくる遊びや生活を通して、一人ひとりが主体的に生きる力の基礎となる「根っこ」を育んでいます。

コロナ禍の生活も3年目になりました。幼稚園でも、感染予防のため、マスクの着用や身体的距離の確保などといった新しい生活様式を取り入れた園生活を送ることになり、従来、当たり前のようにしていた保育活動を、感染状況に応じて見直しながら展開してきました。

本園は小規模園で教員全員が一人ひとりの子どもの姿を見守りやすいこと、豊かな自然に囲まれていること、豊東小学校が隣接していることといった恵まれた環境を生かした保育に取り組んでいます。思い思いの遊びだけでなく、異年齢グループでの散歩や栽培などを通じた活動、小学校との交流などは、計画的に実施

しています。まだまだ、人とのかわりが制限されることも多いのですが、子どもの成長を保障するために、教員全員で、今ある環境を生かしたり改善したりしながら、様々な動きや遊びを生み出す環境を再構成したり、指導を工夫したりしています。

小学校と幼稚園の境には、園歌にも歌われている大きなクスノキがあり、木陰は児童と園児のよい交流の場になっています。子どもたちもクスノキのように大きく育つように、幼児期に「心の根っこ」を丁寧に育てていきたいと思っています。



大きなクスノキ

「読むこと」単元を中心に



周南市立夜市小学校
教諭 花岡 鉄平

1 はじめに

先生方から、国語科の授業づくりに悩んでいるという声をよく聞きます。「決まった答えがない」ように思えるし、かといって「どんな答えでもよい」わけでもない。子どもが、「何を」「どのように」学べば、国語科としての学びが充実したと言えるのだろうか、という悩みです。

その問いについて考えるために、まずは学習指導要領の目標を押さえておきましょう。「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(後略)」つまり、子どもが自ら、言葉に着目し、捉え、見つめ直すことを通して、言葉への自覚を高めながら、資質・能力を身に付けることが国語科の学びとして重要だということです。ポイントは、子どもが主体的に言葉に向かっているか。「見方・考え方」は、子ども自身が意識的に働かせることの意義が大きいからです。

では、子どもが主体的に教材の言葉に向かう授業づくりで、大切になるのはどんなことでしょうか。私は、学習課題や言語活動が、子どもにとって必然性のあるものになっていることだと考えます。学びの必然性は、「考えたい！」(子どもの思考に沿う)や、「やってみよう！」(子どもの興味に合う)という思いがあれば生じやすいでしょう。そうした思いを生むためのポイントを、「読むこと」を中心にいくつか挙げてみたいと思います。

2 教材研究の工夫

教材研究は、授業づくりの第一歩と言えるでしょう。一見面白そうな発問でも、教材の特性を踏まえたものになっていなければ、国語科としての学びにつなげるのは難しくなります。

文学的文章でも説明的文章でも、教科書に掲載されている作品には、子どもの心に引っかかる点をもっています。教材を読む際は、まず、気持ちをフラットにして、子どもの視線に立ち、朱書きのないものを読んでみるのがよいでしょう。面白いところはもちろん、分かりにくいところや疑問、自分とは違うと感じるところなど、子どもが意識的・無意識的に着目しそうな点を拾い上げてみましょう。その後、文種に合わせて分析的に読んでいきます。その際、「教材の特性」「学習課題」「付きたい力」がつながっていることを意識しましょう。

① 文学的文章

大まかに言えば、物語文は中心人物の変容を軸に描かれます。その変容がどのように描かれているか、どのような意味をもつかをつかむことが、教材研究でも大きな

な意味をもつでしょう。例えば、人物や場所、時間等の設定、語り手の視点、中心人物の変容前後の比較、人物相互の関係、クライマックスなどの視点も、軸となる変容との関係を明らかにしながら読むと、教材の特性がよりはっきりしそうです。

② 説明的文章

説明文には様々な文種がありますが、一般的な軸は、全体を貫く問いと答えです。問いが明示されない文章でも、筆者が最も述べたいことの軸は通っています。筆者は読み手に何を伝えるために、どんな事例を選び、どんな順序・構成・表現で述べているのかを探りながら読んでいきます。その際、そうした筆者の工夫が、主張を伝えるのにどう役立っているかを探りながら読むと、問いの卵になるその文章のよさや疑問点が見つかることでしょう。

3 学習課題・発問の工夫

教材研究を経て、「教材の特性」「付きたい力」と関連付けながら、学習課題・発問を構想していきます。ここでは、叙述を確認する一問一答の問いではなく、子どもが1時間または単元をかけて追究する必然性を感じるような、多様な答えが想定できる問いについて取り上げます。

子どもが追究したくなるような発問のためには、ちよつとしたしかけが必要です。例えば、ズレを意識して発問をつくるのが考えられます。「あれ？」「今までの考えと違うな」という、子どもの経験や直観とのズレを意識させたり、二択で問うことで、他者とのズレを意識させたりします。

こうすることで、子どもは、そのズレを解消するために、本文に立ち返って、言葉を再度吟味していくことでしょう。子どもにどんなズレを起こすかを考えることは、逆に言えば、子どもがどのような思考をしているかを想定することです。

また、先に述べた二択で問うことを始めとして、順位を付ける、図に表すなど、各自の判断を問う発問も有効です。自分の立場をもつことで、考えをまとめたり、他者の考えと比較したりすることもしやすくなります。

4 課題設定の工夫

1時間の授業場面で考えてみましょう。せっかくの学習課題・発問も、前置きなく子どもに提示するだけでは、なかなか必然性に結び付きにくい場合が多いでしょう。授業の導入は、その問いに向かう必然性を高める場にした方がいいものです。

例えば、「海のいのち」(6年)で、太一が瀬の主と戦わなかったことの是非を問う主発問を行うとします。その前に導入で、太一の夢を想起させると、太一の行動の不可解さが際立って追究意欲を高めたり、他の場面と結び付けて考えるきっかけとなったりすることが期待できます。このように、導入では、課題提示をより明確にしたり、追究活動への足場掛けとしたりすることなどをねらいます。

ただし、導入はできるだけシンプルに行い、課題を追究する場に使える時間を十分に確保しましょう。

5 対話場面の工夫

発問に対して自らの考えをもった子どもが、友達と対話する場を想定します。そのとき、子どもはどういう意識で対話に向かっているでしょうか。

対話を活性化するためには、お互いにその対話の目的(解決したい問い)を共有できていることが大切です。また、それぞれの考えに違いがあるからこそ、相手の

話を聞く必然性が生まれます。この「目的の共有」は、前述の子どもの思考に沿った発問と導入の工夫がポイントになりそうです。では、もう一つの「違いの明確化」はどうでしょうか。

もちろん、板書の工夫やICT活用も大切ですが、ここでは、意見の伝え方を挙げてみます。意見をまとめ、交流する際に、問いに対する自らの立場（主張）と合わせて、根拠となる叙述、根拠と主張をつなぐ理由付けを意識するようにします（主張→根拠→理由付けの三点セット）。そうすることで、立場は同じだが理由が違う、同じ根拠を選んでいるが立場が違うなど、それぞれの意見の差異がはっきりし、論点が明確になります。

大切なのは、こうした子ども同士の見解交流により、考えが更新されていくことです。しかし、だんだんと深まっていく対話をつくることは難しく、それぞれが意見を言い合うことに終始してしまう場面も多く見られます。

交流場面を深まりのあるものにしていくためには、主たる発問に対する意見が概ね出尽くした後の展開を想定しておくことが大切になります。話合いの流れを様々なシミュレーションしておき、対話から生じた新たな疑問を取り上げて焦点化したり、対話では見過ごされていた新たな視点に気付かせたりするのです。つまり、展開の後半に「もう一手」を想定しておくのです。

学級が対話に慣れてくると、こうした発言は子どもから発せられることも少なくありません。そのときは、うまく拾い上げ、子どもの言葉をみんなの問いに変えていくとよいでしょう。こうした焦点化を始めとして、対話を充実させるためには、教師の問い返しも重要になってきます。

6 まとめと振り返りの工夫

授業の終末では、対話で見えてきたことを共通理解としてまとめていきます。これは、全員の読みを揃えるというよりも、めあてに対応する本時の成果を、子どもの言葉で整理すると考えた方がよいでしょう。みんなで話し合ったからこそ辿り着いたという喜びを共有したいですね。

そして、最後には、振り返りの場として、学びを個に返す時間を確保しましょう。子ども一人一人が、それぞれの言葉で、自分の学びを見つめ直し、意味付けていきます。誰のどんな着眼点が有効だったのか、どんな考え方が発見をもたらしたのか。こうした手応えの積み重ねは、きつと新たな学びへの主体性につながっていきます。

7 おわりに

ここまで、「読むこと」の授業づくりを通して、子ども主体の授業の在り方を考えてきました。

忙しい日々の中で、じっくりと教材研究をしたり、納得いく授業計画を立てたりするのは、本当に難しいことです。ただ、せっかく国語科の授業を行うのであれば、言葉の意味や働き、使い方へのこだわりは大切にしたいものです。そして、子どものつぶやきを捉え、子どもの思考に沿って、授業をつくっていくことが大切ではないでしょうか。そうした授業の中にこそ、子どもにとっても教師にとっても、国語科の学びの楽しみがあるのだと思います。

中学校



下関市立安岡中学校
教諭 川口 由美子

若手に伝えたい国語授業の喜び

国語授業は何を目指せばいいのか

1 「国語はどう勉強するの？」だって読むだけ。答えは書いてあるし。」

2 「国語は嫌い。だってはつきりした答えがないから。」

若い頃、生徒のこんな言葉に悩んだ。1の生徒は答えはあるといい、2の生徒はないという。若いあなたはそんな生徒にどんな授業をするのだろうか？

ちるさくら海あをければ海へちる

高屋 窓秋

難しい言葉はない。意味もわかる。俳句で季語や定型があることぐらい生徒は知っている。授業は5分で終わりそう。感想でも聞いてみようか。ある子は「キレイ」ある子は「悲しい」と言う。確かに答えが決まらない。どう返そうか。「悲しいは間違いだ」か「両方いいね」か「どっち？」か。迷いが頭をかすめる。この授業でホントに国語の力がつくのか？…これは、私がずっとつきつけられてきた問いだ。国語教師はみんなたぶん同じだろう。

主体的であるということ

「主体的・対話的で深い学び」の「主体的」はなぜ最初なのか。今の私はこう答える。自分で言葉にすることからしかなら、学びはスタートしないから。「キレイ」と感じたのはあなただ。どんなに拙くとも、言葉には責任をもたせる。だから私はこう尋ねる。「どこからそう思ったのか、あなたが言葉にして」と。この答えは外部にはない。だから子どもは必死に、もがきつづなると言葉にしようとする。それは他者である教師・言葉という鏡に向き合わされることで新たに生まれた「主体的な言葉」である。心の中で静かに言語活動が営まれる。沈黙の中で言葉の滴がたまってくる。さあ、聴かせて。

生徒① 「真つ青な海と桜がキレイだなと作者が見ている。」

教師 「俳句には作者の姿はなかったけどね。」

生徒② 「桜の木が崖の上にあつて、海が下に広がっている。」

教師 「ふうん、桜と海の位置関係ね。同じことを考えた人は？いるね。じゃあ、あなたの言葉で話してみて。」

生徒③ 「海辺で高いところに桜があつて、それで風が強い。」

生徒④ 「いや、風が弱くて、花びらが落ちるように散っている。」

教師の仕事は「あなたの言葉」にこだわらせることだ。そして言葉からその子の「ものの見方・考え方・捉え方」に気づかせていく。上記の生徒の言葉には「桜」「海」の位置関係の視点や「崖」「作者」「風」「花びら」といった「書かれていないこと」への読み取りがある。だが、このままなら「主体的」ではあるけれど、まだ独りよ

がりがな恣意的な読みの羅列に過ぎない。生徒③・④の発言は対立している。さあ、どうしよう。

対話的であること(二)

「みんな違ってみんないい」確かにそう。「わたしと小鳥と鈴と」の個性の違いならば。若い私は一生懸命な発言であれば何であれホメた。結果、「対話」は全く授業はばやけた。今は違う。子どもは自分に向き合って言葉を紡いだら、同じように紡がれた仲間の言葉を聴きたいとわかるから。「対話」とは相手への同調や否定ではなく、「言葉」に焦点をあて、言葉の動きや根拠を確かめ合うことだとわかるから。そして誰より私が「対話」したいから。

教師 「2人の意見は違うね。みんなはどう思うか聴かせて。」

生徒⑤ 「あをければ」って「青いから」ですよ。もし強風だったらそんな選択肢はないと思います。」

生徒⑥ 「ちる」だから花びら。強風だったら「飛ぶ」とかになる。強風なら別の表現になるんじゃないかな。」

教師 「花びらは『ちる』途中？ それとも海に浮かんでる？」

生徒⑦ 「浮かんでる。青と桜色のコントラストに作者は惹かれている。」

生徒⑧ 「それなら『散った』でしょ。『ちる』って書いてある。」

生徒⑨ 「海へ」は散る途中。海に浮かんでるなら『海に』になる。」

教師 「もう少し、今の言葉に誰か説明を足してくれないかなあ。」

生徒⑩ 「へ」は海の方へという方向、「に」は海に着いて浮かんでる。」

「対話」は真剣勝負だ。教師の役割は子どもの発した言葉に含まれる価値を見だし、みんなで考える思考の流れを生み出すことだ。難しい？でも大丈夫。上の傍線部のことだから。心がけていることはただ一つ「教師自身がわからずやにならず率直な疑問をつぶやく」こと。子どもは困った顔をし、わからずやを助けようと言葉を紡ぐ。やがて子どもたちは気づく。自分の考えがみんなに伝わり、考え、「対話」を通じて追究する価値とおもしろさに。

深い学びへみちびく

なぜ「深い学び」なのか。「学力を高める」「知識を積み上げる」と逆の下へのイメージ。それは「腑に落ちる」「深く納得する」と同じで、まず問いを持ち、追究する過程で価値ある何かを体ごと身につけていく学びだ。

例えば先の授業記録で授業が終わったらどうだろう。これでこの俳句を深く学んだことになるか。もやもやが残る。子どもも「書かれている」ことの奥に深く潜む「書かれていない何か」を考えたいがっている。そして教師の役割は、その「何か」へ向けて思考を集中させる「問い」を発することだ。

教師 「悲しい心情を感じた人がいたよね。わけを聴かせて」

生徒⑪ 「青は気持ちいがブルーって言う。あと『ちる』。美しく悲しい。」

生徒⑫ 「散ろうという桜の意思があるんです。だから悲しい。」

生徒⑬ 「ちる」が二回もあって、作者はさびしいのかと思いました。」

生徒⑭ 「質問だけど、海が青く見えるって近いの、遠いの？」

教師 「なるほど。作者はどこにいたんだろうか？」

生徒⑮ 「海が遠く見え、しかも花びらが見える距離。」

生徒⑩ 「高い所。上から下へと落ちるのを追ってる。上から見る。」
教師 「それでみんないい？ それと『悲しさ』は、これまでの発言とどう関わる？
作者はどんな人？ もう一度、班で読んでみて。」

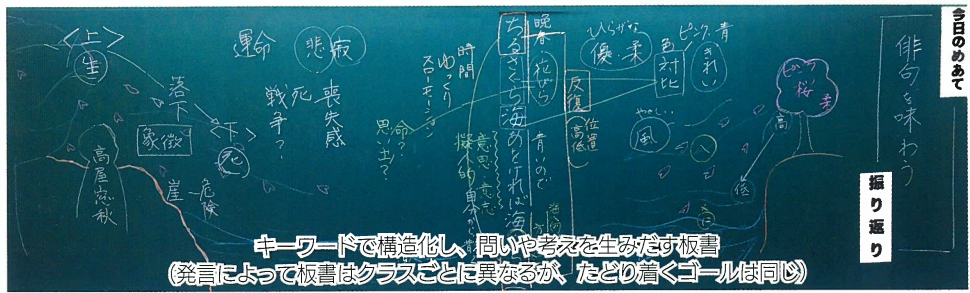
子どもたちの追究したい「何か」とは？ それは「作者」だ。生徒①⑦で「作者」の視点で捉えた情景を想像した。⑥で「ちる」と「飛ぶ」では「別の表現になる」と表現意図に迫り、「へ」「に」に着目した。そして⑬で作者の心情を根拠に説明しようとした。だから教師は傍線部で「作者」に焦点化する「発問」を切り出す。この先は、どの学級でも驚きの連続だった。「戦争。亡くなった人を思い桜と海を見つめてる」「花びらが思い出の一枚一枚。スローモーションで流れていく」「何かを喪くした人」など。あちこちから「ああ」「わかる」の声。「高屋窓秋」の知識も来歴も不要だ。言葉だけが作者像を結ぶ。根拠を問えば明確に答えた。こうして子どもたちは「作者 高屋窓秋」のものの見方や心境に深く迫り、言葉の背後の「人」に出会い、俳句を味わった満足感に「腑に落ちた」顔で学びを終えた。

国語授業の喜び

心の中で（こんな授業は難しい。評価は？）と思うだろうか。私もそうだった。ワークや○×問題で一斉授業し、テストで評定を出していた。でも、評定と評価は違う。テストで評価できる力は一部だ。授業中の言語活動の全てをみると、発言を求め、耳を澄まし、書かせ、目を通して、ふりかえらせる。逆に訊きたい。「それなしにどうやって評価し、支援できるのか」と。

昔「国語は技能教科だ」と言われ驚いた。その真意は「言葉の力は使うことなしにつかないから」。深く納得した。1週間168時間ほぼ日本語を使う中、あなたに3、4時間の国語の時間が与えられている。家庭学習・塾で知識は学べる。ユーチューブ視聴で学べないことは何か。それは、言葉に向き合い、言葉を使ってみんなで探究していくことだ。いろいろな先達に学び、ご指導いただき励まされることで、私の授業は少しずつ変わってきた。

言葉は意味や情報だけでなく、情感を伝え人とつながる力をもっている。教材研究し、子どもの言葉を予想し、授業を重ねるにつれ気づいた。いろいろな道をたどっても目指すゴールは同じだと。すると子どもたちの声があだんだん聴きとれるようになってきた。その声には個々の生活経験の違いを乗り越え、拙い言葉でも勇気を出して伝えたい何かを響いていた。子どもは誰しも言葉の背後にある生きる真実に出会い、成長したいと願っている。私も同じだ。難しくない。ともに学ぶのだから。だから国語授業は喜びなのだ。



キーワードで構造化し、問いや考えを生み出す板書
(発言によって板書はクラスごとに異なるが、たどる着くゴールは同じ)

次世代を生き抜く力を育成するためのプログラミング教育 — 関係機関との連携による組織的な取組を通して —



山口市立仁保小学校

校長 荒木 和博

1 研究のねらい

人口減少やAIの進化、グローバル化等、社会が急変する中、子どもたちが多様な人々と協働しながら主体的に未来を切り拓く力を育成することが求められている。一方、新学習指導要領においては、プログラミング的思考、ICT等を活用してよりよい社会を築いていこうとする態度等、新たな資質・能力を育むことが求められている。

そこで、山口県小学校プログラミング教育推進事業の取組や研究指定校としての本校の実践を通してプログラミング教育の在り方や成果と課題を明らかにするために研究を進めることとした。

2 研究の実際

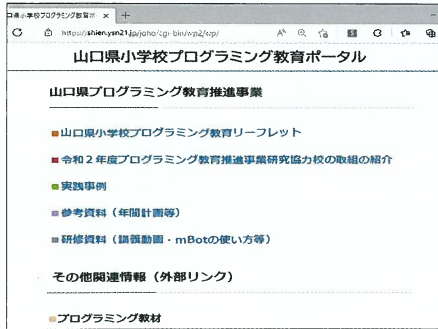
【山口県プログラミング教育推進事業概要について】

① 研究協力校による授業公開

- ・ プログラミングロボットを活用した授業を含む2つの授業を公開し成果を普及・啓発

② 山口県小学校プログラミング教育ポータル

- ・ 実践事例、研修資料（講義動画、研修モジュール



【研究協力校の実践について】

① 校内の研究体制の構築

- ・ 研究を進めるための校内組織の整備及びカリキュラムマネジメントによる教育課程上への位置付け

② 公開授業に向けた実践研究

- ・ 大学教授の講義や指導主事による指導案検討
- ・ 指導を踏まえた全体研修やブロック別研修

③ 公開授業の概要

【公開授業1】（アンブラグドプログラミング）

○ 第3学年 学級活動「地震から身を守る」

- ねらい：地震の避難行動について、プログラミング的思考を用いながら、場所による危険性や避難行動の違いがあることに気づき、適切な避難行動に関する実践的な態度を育てる。

○ 授業の展開

- ・ 教室からの避難につ



3年授業風景

- 他）、参考資料（指導計画他）等をWebで公開
- ③ 地域や関係機関との連携
- ・ 「やまぐち型地域連携教育」による地域の支援や他校種、大学、教育センター、民間企業等との連携

【公開授業2】（ロボットプログラミング）

○ 第5学年 総合「未来のロボットを考えよう」

- ねらい：高齢化や人口減少といった地域の課題を解決するため、プログラミングロボットの2種類のセンサーを使い、特産物を安全に効率よく回収するプログラムを考える。

○ 授業の展開

- ・ ライントレースセンサーを使って楕円状のコースを動くプログラムを考える。
- ・ 超音波センサーを使って2つのコースを2台のロボットが安全に動くプログラムを考える。
- ・ より効率的な動きになるよう試行錯誤を行いながら数値の設定等を行う。
- ・ 地域の未来の課題解決について話し合う。

3 成果と課題

本実践を通し、児童のプログラミング的思考力や問題解決能力等の育成や教職員の指導力の向上など一定の成果を得ることができた。また、様々な関係機関と協働した取組により、連携したプログラミング教育を推進することができた。

一方、発達段階に応じた目標や各教科等での系統性のある指導内容、指導時間の確保等を明確にしていくこと、また、教員の指導力の更なる向上や格差是正のための研修体制の充実等が今後の課題と言える。



5年授業風景

大井から世界へ プログラミング的思考を 育てる学習を通して



萩市立大井小中学校 小学部
教頭 岡田 淳

日本海へと流れ出る大井川がもたらせた肥沃な土壌で、玉ねぎの二毛作が行われる大井地区、その中心部に本校は位置している。地域の方のいか釣り船が漁港に並び、阿武（おう）の松原から望む日本海は美しく輝いている。完全複式学級であるが、小中一貫校として、様々な活動を中学生と一緒に、楽しみながら多様な体験をさせるように仕組んでいる。「じゃあ、この数値をこう変えたら」。

「これとこれを組み合わせたら」。
高校生からのアドバイスを受けながら、小学生がキーボードを操作している。今年度は、5・6年生を中心に萩商工高等学校と連携したプログラミング学習に取り組んでいる。Ichigojam というマイクロコンピュータを使った学習である。

はじめは、高校生が言語を示し、その通りに小学生が打ち込み、予定通りの動作を再現できたか、正しくプログラミングできかたかを全員で確認するという作業を繰り返した。複数のプログラムを学んだ後は、数値や組み合わせを変えて試してみようという思考の流れが自然に生まれ、プログラムを発展させていった。

子どもたちは、プログラミング時に「くだったら」「もしもしたら」という視点で手順や内容を考え、試行錯誤をしながらゴールまでの筋道を模索している。これは、頭の中で手順のシミュレーションを行うことであり、国語科や社会科、算数科、理科などの学習でも

同様の場面がある。

子どもたちの思考を可視化し、プログラムの組み方や数値による動きの違いなどを全体で共有することで、対話が生まれ、自分の考えを伝え合う、深め合う場面が見られるようになった。課題解決のための、たくさんの情報の中から正しいものを選んだり、考え方が直感によるものや不適当なものを排除したりする活動も見られるようになってきた。

プログラミング的思考を実生活と結び付ける際、特に大切にしていることがある。それは、「子どもたちの課題意識から発生」した、プログラミング学習を活用できる内容を考えることだ。夢物語で「いつか未来に」ではなく、子どもたちが抱いている「今の課題」を解決するための第一歩になる、それを実感できる取組にすることだ。もちろん、一人だけで考えるのではなく、クラス全員の考えを共有し、全員で試行錯誤をしながら方法を見出していくことが大切である。ここでも、子どもたちの思考を可視化し、全体で共有、比較しながらよりよい方法を見出していくのだ。難しいことではあるが、これが結構楽しい。

目指すゴールにたどり着く方法の一つではない。自分の考えとは違うものと出会うことで、考え方の幅・視点が広がる。そして、「世界も広がっていいよ」と応援している。



萩商工と連携したプログラミング学習

令和4年度 助成事業等一覧

1 現職研修助成事業	(合計46件 142万円)	
種別	応募件数	採択件数・助成金額
学校研修	56件	38件 118万円
グループ研修	8件	4件 12万円
サークル研修	2件	1件 3万円
個人研修	5件	3件 9万円

2 地域活性化活動助成事業

(合計54件 168万円)

応募件数65件
採択件数・助成金額

1件×5万円	5万円
4件×4万円	16万円
49件×3万円	147万円

3 教育団体研究補助事業

(合計6件 60万円)

3 教育団体研究補助事業	団体の部
小学校教育研究会	15万円
中学校教育研究会	15万円
公立学校教頭会	15万円

団体の部II (全国大会・中国大会等)

全国国公立幼稚園・こども園PTA全国大会山口大会	5万円
中四国小学校体育研究大会山口大会	5万円
山口県へき地教育研究大会	5万円

4 支部活動振興助成

(合計7支部1団体19件 62・2万円)

終身会員の紹介

原田 啓司 (防府)	小松 茂文 (宇部)
岡本 昭彦 (防府)	田上 文雄 (下関)
植野 真生 (防府)	黒杭 謙 (岩国)
原田 竜臣 (防府)	山本 浩二 (由宇)
中村 雅之 (防府)	奥屋 隆伸 (光)
今坂 雅志 (防府)	坂本 哲彦 (山口)